こんにちは

神山えつこです No.120/2006.5

発行：日本共産党郡山地区委員会
〒963-8866 郡山市桑野清水台48-8 後藤ビル1F ☎922-3801 FAX932-1903
Eメール jcpfskg@jcp-fukushima.gr.jp

障がい者小規模作業所
存亡の危機

補助金 今年4月から 国は全廃 県は半減

一生懸命作業をする、郡山市のNPO法人ペンギン村第3作業所のみなさん（4月24日）

国が補助金を全廃
↓
県が運営費補助金のうち加算部分の補助金を半減
↓
悲鳴を上げる小規模作業所

穴沢理事（右端）に申し入れる神山、長谷部両県議、藤川、宮本両福島市議、阿部県議候補＝13日、県庁

県 事前説明もなく突然削減

日本共産党 削減をやめ前に戻せと申し入れ

障がい者が自立するために活動を続けている「小規模作業所」に対して、国は今年度予算で補助金をまったく出さなくなり「今後の運営をどうしたらいいのか」と悩んでいた矢先、今度は、今まで県が出していた運営費補助金のうち、加算部分の一人あたりの補助金をほぼ半分にしてしまいました。

関係団体から強い抗議の声

県はこの削減をするにあたって、小規模作業所や市町村に対しても、事前説明をせず、突然の補助金カットをしました。こうやり方に、関係団体からは強い抗議の声が上がっています。

弱者へあたたかい県政を求める

日本共産党県議団と福島市議団などは、四月一三日、福島県の穴沢直轄理事に対して、補助金の削減をやめること、県民の医療、福祉、教育への予算を十分確保すること、財源は不要不急なムダな公共事業を中止すれば確保できるのだから、弱者へのあたたかい県政をすること、を強く申し入れました。

これに対して穴沢理事は「深刻な事情はよく分かったので、知事と担当部長に伝えます」と答えました。

本紙が創刊一〇年

「こんにちは神山えつこです」は、一九九六年四月発刊以来、本号で九十年を迎えました。

多くの市民の皆様に支えられ、その時々の県政の課題・県民の暮らしの問題を報じ続けてきました。

あらためて皆さんに感謝するとともに、今後もより一層の紙面充実に取り組みますので、よろしくお願いいたします。

郡山から見た 県政ア・ラ・カルト 郡山

今時「そんな市があるんですか」

◆広げて、伸ばして五十万都市の蜃気楼

現実は「シャッター通り」「雨戸屋敷」

去年の暮れから郡山市はテレビのワイドショーで連続放映されて、全国的な話題に。あのゴミ屋敷騒動だ。舞台になったのは無住の空き家。旧市街地だけでなく、近郊の住宅地でも雨戸（ブラインド）を閉じた住宅が目立つ。アパートもガラガラ。商店街はシャッター通り。全市的にスプロール化（虫喰い状態）がひどい▼だが原市政は「人口五十万人の広域拠点都市を目指す」と大風呂敷。昔なつかしい香りただよう駅前一日の出通りを広げて伸ばす。八山田や富田などの区画整理地区では保留地が売れず困っているのに、隣の喜久田にも広げている。一方県は無秩序な郊外の開発に待ったをかけ、「歩いて暮らせるまちづくり」（コンパクトシティ）の実験モデルに郡山市を設定。「都市規模の創造的縮小」は全国的な流れ。時流に逆流する原市政の行方は。

◆「マッチ・ポンプ」か「呉越同舟」か

世にも不思議な郡山市の庁議

三千人の会場に一万枚の市長パーティー券を市職員が売りさばいて、これまた新春の全国的話題になった郡山市。とんだ副産物も出現。郡山市政の意志決定機関である庁議（幹部会議）に、行政をチェックすべき代表監査委員が出席して、論議に参加している事実が判明。共産党の高橋善治市議が代表質問で追及した▼ビックリしたのは一般市民。マスコミも慌てて他市の状況を調査。返ってきたのは「今時そんな市があるんですか？」との答え。行政と監査は一線を画すべき関係なのに「呉越同舟」とは。「マッチ・ポンプ」なら話は分かる。さらにパーティー券の仲介のためならあり得る話だとの声も聞く。庁内はXデーを前に寂として声無しとか。

◆石川の今出ダムにも「五十万都市」の影

神山県議の見直し提案が実現

郡山市は古代より阿武隈川水系を軸に発展してきた地域。ところが山を越えた久慈川水系の今出川のダム建設との関係が浮上。郡山市も今出ダムから飲水のため供給企業団に参加。郡山市は水は充足しているのに「広域水道事業としての補助を受けるための人口要件五十万人以上を満たすための参加」を名目に参加している▼一昨年の十月県議会で神山県議は「利水見込みの減少は明らかなので、今出ダム全体の事業見直しに県が直接責任を持って関与するように」と求めた。県は「利用市町村の判断を尊重する」と答弁。これにより、今年二月に計画の見直しが決着した。（S）